

聖書：マタイ 9：27～35

説教題：御国の福音を宣べ伝え

日時：2019年3月3日（朝拝）

この福音書の 8 章以降、イエス様の様々な癒しの御業が続けて記されて来ましたが、今日はその塊の最後の部分となります。35 節はこれまでのことをまとめた言葉です。その前に、最後に書き留められているのが二つのイエス様のみわざ、すなわち目の見えない人のいやしと口のきけない人のいやしです。この箇所を読む上で頭に入れておきたいのはイザヤ書 35 章 5～6 節の御言葉です。そこにはやがて遣わされるメシヤの時代にはどんな祝福が臨むようになるかについて、次のように言われていました。「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」この中の「目の見えない者の目は開かれ」と「口のきけない者の舌は喜び歌う」という奇跡が今日の箇所で行われます。つまりこのことはイエス様こそ、旧約聖書から預言されて来たメシヤであるということを語るものです。本来人間は良いものとして造られ、病や苦しみはこの世に存在しませんでした。人間が罪を犯したことによって、これらの災いが臨むようになりました。しかしやがて来られるメシヤは人間と世界をその悲惨から救い出してくださる方。その方によって様々な苦しみの中にある人間はそこから解き放たれ、人間性を回復し、本来の輝かしい姿を取り戻して行く。それが究極的に実現するのはやがて完成する天の御国においてですが、イエス様が到来したことによって神の国の祝福が地にもたらされ始めている。その祝福にあずかった人々のことがここに記されています。

まず最初は 27～31 節の「目の見えない人々」です。彼らは「ダビデの子よ。私たちがあわれんでください。」と叫びながら、イエス様について来ました。「ダビデの子」はメシヤ称号です。この二人は、やがて来られるメシヤは目の見えない者の目を開いてくださる方であるというイザヤ書 35 章のメッセージを知っていたのでしょうか。その期待を抱いて、イエス様に向かって「ダビデの子よ」と呼び、ついて来ました。しかし 28 節を見ると、イエス様は家に入るまで彼らに取り合わなかったようです。なぜイエス様はそうされたのでしょうか、そのことは後で触れたいと思います。イエス様は外では彼らに向き合いませんでした。しかし家に入るとイエス様の方から声をかけられ、こう問われました。「わたしにそれができると信じるのか。」イエス様がいやしを行われる場合、通常の方法はこれです。すなわち「信仰を通して」恵みを注ぐということです。イ

イエスは他には何も求めておられません。求めるのはただ信仰のみです。「それがわたしにできると本当に信じるのか」と。そして「はい、主よ」との彼らの告白を経て、イエスは彼らの目にさわられます。ここにもイエス様の憐れみが示されています。イエス様はただことばで命じるだけで彼らをいやすことができましたが、目が見えていない人たちが何が行われているかを知ることができるために、あえて彼らがいやしを必要としているところに触って、彼らを感じるができるようにしてくださいました。そして「あなたがたの信仰の通りになれ」と言われました。すると何と彼らの目は開きました！今まで目の見えていなかった人たちが見えるように変えられたのです！ここに改めてイエス様を信じるということが大事であることを思われます。イエス様は神が遣わしたメシヤで、目の見えない人を見えるようにする力を持っていると知っているだけでは不十分。その知識に基づいて、イエス様はこの私が願い求めれば、この私にもただ恵みにより、そのようにしてくださいと信じて、より頼むことが大切です。そうする人にイエス様は「あなたが信じたとおりになるように！」と言って、ご自身が用意した祝福を注いでくださるのです。

イエス様はその後、彼らに厳しく命じて「だれにも知られないように気をつけなさい」と言われました。なぜこのようなことを言われたのでしょうか。同じようなことはすでに8章4節にも記されていました。ツアラアトがきよめられた人に対して、イエス様は「だれにも話さないように気をつけなさい」と言っておられました。なぜそうなのか、その理由ははっきりとは書いてありませんが、イエス様はご自分が誤って理解されることをなるべく防ごうとされたからでしょう。イエス様は単に不思議な力で人々をいやし、助け、現世的な利益を与えるだけのメシヤとご自分がとらえられたくはなかった。イエス様は人々の根本問題の解決のために、十字架にかかって人々の身代わりの死を遂げてこそ、罪人たちを罪の呪いとその力から解き放つ救い主です。同じ理由で最初の27節でも、目の見えない二人に取り合わなかったのだと考えられます。彼らはイエス様を「ダビデの子よ」とメシヤ称号で呼びました。そのように呼ばれている公衆の面前で彼らをいやしたなら、人々は益々誤ったメシヤ観を持つに至ってしまうかもしれない。そこでイエス様は家の中に入るまで、このみわざを行わなかったのです。そしていやした二人に、このことを誰にも知らせないようにと言われたのです。

しかしその結果はどうだったのでしょうか。31節にある通り、この二人は言い広めてしまいました。もちろん目の見えない人が見えるようになったら、周りの人々に知ら

れないようにすることは難しいことです。しかしここに書いてあることは仕方なくそうなったという話ではありません。この二人は「出て行って」言い広めました。しかもこの彼らが、その地方全体に言い広めました。彼らとしては嬉しくて仕方なかったのかもしれないかもしれません。黙っていることができなかつたのかもしれないかもしれません。しかしイエス様は「厳しく命じた」と書かれていました。イエス様は真剣にそう命じられました。軽く話したのではなかつたのです。そういう意味で、この二人の信仰は不十分だったと言わざるを得ませんね。「主よ」と呼んでいたはずなのに、その言葉の意味が分かっていない。これではイエス様を主としていることにならない。彼らは自分の考えや自分の喜びを優先し、イエス様に従うことを後回しにしたのです。そしてイエス様を邪魔する行動を取つたのです。素晴らしい御業がなされたのに、こうして後味が悪い記録となってしまっています。

二つ目に記されているのは 32~34 節の口のきけない人です。その人は悪霊につかれていて、その状態にありました。人々が彼をイエス様のところに連れて来ます。そしてどうなったか。マタイはここでも簡潔です。悪霊は追い出され、口のきけない人はものを言うようになります。イエス様がイザヤ書の預言するメシヤであること、そしてその方による神の国の祝福がここにも現れ始めたことが記されています。群衆は驚いて「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こつたことがない！」と言います。そんな中、これと違うもう一つの反応もありました。それはパリサイ人らの反応です。彼らは 34 節で「彼は悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ！」と言います。彼らは信じがたい出来事が起つていることを自分たちの目で見ました。しかし彼らはすでにイエス様に敵対し始めていました。そこで超自然的なことが行われたのは認めるが、それは神によつたのではなく、悪霊どものかしら、サタンによつたのだ！と中傷したのです。このように奇跡を見たからと言って人は信じるわけではないということです。見たら信じる、だから見せてみろ、とある人たちは要求しますが、たとえ見ても、信じたくないと思っている人は信じないし、むしろそれを悪魔のせいにする。せっかくメシヤによる素晴らしい救いのみわざが行われたのに、このエピソードもまた後味の悪い仕方で終わっています。

そうした後に 35 節のことばがあります。「それからイエスは、すべての町や村を巡つて、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。」ここはどちらかと言えば、その後の 36~38 節とセットになっている言葉です。

ですから来週もう一度この 35 節から見たいと思います。しかしここは今日までの箇所と来週以降の箇所をつなぐ蝶番のような箇所で、私たちはこの 35 節を今日の箇所とのつながりで見るとも大事だと思います。その時、見えて来ることは何でしょうか。それは今日の箇所で色々なことがありましたが、イエス様は宣教活動をやめにしていないということです。ある意味で今日の箇所には人々の残念な姿が記されていました。せっかく神の国の祝福をもたらしているのに、落胆したくなるような人々の現実がありました。しかしイエス様はそのような応答を受けたからと言って、心乱され、怒り、もうやめにしよう！と言って投げ捨てておられません。イエス様は何事もなかったかのように、なお前進しています。すべての町や村を巡って、癒しの御業を行いながら、御国の福音を宣べ伝え続けた。このイエス様のお姿を最後に私たちの心に焼き付けたいのです。

私たちだったらどうでしょう。せっかく目の見えない人を見えるようにしてあげたのに、あれだけ言い広めるな！と厳しく命じたことをその人たちは守らなかった。受けるものだけ受けて、あとは無視。こんな応答をされてがっかりするのではないのでしょうか。あるいは口のきけない人を悪霊から解き放つ素晴らしい御業をしたのに、そのことで中傷される。悪霊の力によってそうしているだけだと非難される。群衆もただ驚くだけで、それ以上ではない。イエス様にとっても、これらはある意味で悲しい応答だったと思います。理想通りではない現実がありました。にもかかわらずイエス様は前進されました。ここでやめられませんでした。人々の残念な反応に負けられませんでした。むしろご自身がこの世に来た目的に従って、御国の福音を宣べ伝え、神の国の祝福を現し続けられたのです。そしてその行く手に待っている十字架上で身代わりの死を遂げるというご自分の一大ミッションに向かってひたすら前進し続けられたのです。もし私たちが 34 節までだけを読むなら、ここは後味が悪いものとなりますが、35 節も合わせて読むと違って来ます。イエス様は私たちの不信仰また愚かさに打ち勝ってくださいなのです。イエス様は残念な私たちの現実には負けないで進んでくださいました。私たちの救いはこのようなイエス様の一方的な恵みによっています。

最後にこのことから二つのことを短く述べて終わりたいと思います。一つは今日の私たちも、この恵み深いイエス様に支えられているということです。私たちも今日の箇所に出てくる人々のように、不完全な者たちであり、不十分な者たちです。イエス様を信じて恵みをいただいているはいますが、従い切れていない。主よ！と呼びながら、現実には自分中心で、イエス様のみことと反対のことをし、イエス様を悲しませているような

者たちです。しかしイエス様はそんな私たちに失望して、もうやめた！と言って、私たちを見捨てられません。イエス様は人々の残念な応答にがっかりされず、ご自分が進むべき道を最後まで進んで、私たちの救いを勝ち取ってくださったお方です。私たちの救いはこの主によって成り立っています。信仰において不完全な私たちが今日もこうして御前に歩むことを許されているのは、イエス様が忍耐と憐れみをもって私たちをの救いを勝ち取ってくださったからであることを覚えて心からイエス様に感謝したいと思います。私たちの救いを成し遂げるためのこのイエス様の献身、イエス様の粘り強く歩まれたお姿に感謝したいと思います。それ故に私たちはイエス様への愛を告白し、その愛と感謝とイエス様に従う歩みに現す者となるように、そしてイエス様が勝ち取ってくださった神の国の祝福に益々深く生かされることを求めたいと思います。

もう一つは私たちもこのイエス様のお姿にならう者になりたいということです。来週の箇所から新しい段落が始まり、そこから弟子たちもイエス様と共に働く者として召されて行きます。これまではイエス様だけが働いて来られましたが、来週の箇所から弟子たちも遣わされて行きます。今日見たイエス様のお姿は、その私たちにとっての模範でもあるということです。私たちも神の国のためにそれぞれ何らかの使命を与えられています。その使命遂行に当たって私たちもまた失望しそうな時、落胆しそうな時があると思います。色々な人の反応を見てがっかりし、気落ちしそうになる時もあるでしょう。しかし私たちが見つめるべきは、私たちの救いのために粘り強く戦ってくださったイエス様のお姿です。私たちの不完全さ、愚かさにもかかわらず、御国の福音を宣べ伝え続けたイエス様のお姿は、私たちに新しい力、新しいインスピレーションを与えてくれるものではないでしょうか。このイエス様のお姿を心に焼き付け、感謝するところから、私たちもまた周りの人々の反応や状況に動かされることなく、粘り強く、タフに、イエス様にならって、自分に与えられた使命を果たすことへ向かいたいと思います。そうしてイエス様と共に神の国をいよいよ地に來たらせることのために自らをささげ、また用いられる恵みにあずかって行きたいと思います。